

Title	観光と自然表象：南伊豆への移住者を事例として
Sub Title	Tourism and representation of nature : case studies of migrants to Minami-Izu
Author	宮坂, 清(Miyasaka, Kiyoshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2008
Jtitle	哲學 No.119 (2008. 3) ,p.171- 202
JaLC DOI	
Abstract	This paper deals with the relationship between tourism and representation of nature by case studies of migrants to Minami-Izu. In Anthropology of Tourism or Sociology of Tourism, the space of tourism has been seen as the field of political negotiation between 'host and guest'. Meanwhile as it has been argued that anyone moves anytime in these days, the dualism of 'host and guest' should be questioned. Minami-Izu, Shizuoka prefecture have been represented as warm and rich natural environment by writers from Meiji period, and that the novel "Izu-no-Odoriko" made the region as image of catharsis. The opening of railway to Minami-Izu in 1961 made the region as the destination of mass tourism that much depended on the image of these writings. On the other hand, from the beginning of mass tourism there were people diverging to migrate to Minami-Izu as life space. An old man of the region made many cottages by scrap wood by his hands and rented to migrants. The "village" doesn't survive anymore but the spirit of bricolage of the old man survive. There are increasing number of migrants to Minami-Izu some of who built cottages by themselves and further they began to paint pictures. There are another type of migrants who brought new age or spirituality thought to practice. They had relatively clear vision of building space of gathering or healing space. In these space events take place with many migrant's assist. With these case of migrant to Minami-Izu, I argue that the dualism of host and guest should be treated as to be fluid and nested each other.
Notes	特集文化人類学の現代的課題II 第1部 空間の表象 投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000119-0174

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

— 投稿論文 —

観光と自然表象

——南伊豆への移住者を事例として——

— 宮 坂

清* —

Tourism and Representation of Nature: Case Studies of Migrants to Minami-Izu

Kiyoshi Miyasaka

This paper deals with the relationship between tourism and representation of nature by case studies of migrants to Minami-Izu. In Anthropology of Tourism or Sociology of Tourism, the space of tourism has been seen as the field of political negotiation between 'host and guest'. Meanwhile as it has been argued that anyone moves anytime in these days, the dualism of 'host and guest' should be questioned.

Minami-Izu, Shizuoka prefecture have been represented as warm and rich natural environment by writers from Meiji period, and that the novel "Izu-no-Odoriko" made the region as image of catharsis. The opening of railway to Minami-Izu in 1961 made the region as the destination of mass tourism that much depended on the image of these writings.

On the other hand, from the beginning of mass tourism there were people diverging to migrate to Minami-Izu as life space. An old man of the region made many cottages by scrap wood by his hands and rented to migrants. The "village" doesn't survive anymore but the spirit of bricolage of the old man survive. There are increasing number of migrants to Minami-Izu some of who built cottages by themselves and further they began to

* 独立行政法人国立病院機構高崎病院附属看護学校非常勤講師

paint pictures.

There are another type of migrants who brought new age or spirituality thought to practice. They had relatively clear vision of building space of gathering or healing space. In these space events take place with many migrant's assist.

With these case of migrant to Minami-Izu, I argue that the dualism of host and guest should be treated as to be fluid and nested each other.

Key words: tourism, representation of nature, migration, spirituality, Minami Izu

I. はじめに

これまで観光の空間は、観光人類学、観光社会学において、「ホストとゲスト」の交流や売買が繰り広げられる空間として、あるいは「観光のまなざし」の交錯する空間として、注目されてきた。V. L. スミス編の『観光・リゾート開発の人類学』は、ゲスト（ツーリスト）とホスト（地域社会）が、その相互交流において、プロデューサー（観光を制作する者）をも巻き込んでいかに観光空間を生成させているかが論じられた[スミス編 1991]。空間の売り手たるホストは、観光空間を観光客が魅力的に感じるように表象してゲストを迎え、一方買い手たるゲストはその空間表象を経験し、それに対価を支払うのである。またアーリは、海辺リゾートの例を取り上げ、観光のまなざしに変容することにより観光地の景観もまた変貌し、盛衰することを示した[アーリ 1990]。こうした「ホスト/ゲスト」、「まなざす者/まなざされる者」という二元的枠組みによって観光空間を見渡すことの利点は、観光空間を立場の異なる者が繰り広げる政治的なせめぎ合いの場としてみるということが可能になるという点にある。こうした観点到立つと、マスツーリズムにおいては都市的なまなざしを持ち込む観光客や観光開発業者とそれを押し付けられる地域社会というヒエラルキー構造が浮かび上がり、また逆に近年の議論では、逆に地域がイニシアチブを握

り都市的な思想が変質を迫られることがあると指摘されている〔松田，古川 2003:212〕。

一方，人の移動に着目した議論において，現代は人が必ずしも定住せず移動を繰り返す時代であるといわれることがある。クリフォードは「旅する文化」と題した講演録のなかで，旅することと住むことの距離について論じ，プエルトリコとニューヨークの間を行き来しながら生活する人びとにとって，「あなたはどこから来たのですか」という問いよりも，むしろ「あなたはどこからどこへ行く途中ですか」という問いがふさわしいと述べる〔クリフォード 2002:51〕。現代をこのように移動の常態化した時代であるとみるならば，さきの「ホスト/ゲスト」という二つの立場について，これを相互に流動するものとして捉えること，そしてその流動の様相を探ることが必要であると考えられる。現代における観光現象を，ゲスト/ホストの枠組みが流動的な，移動を繰り返す生活に向かって開かれたものとして捉え直す必要があるのである。

こうしたことから，観光客が観光した空間に惹かれリピーターとして何度も訪れたあげく，そこを生活の場として選択し「移住」という現象は，注目に値する現象であるといえるだろう。山下がクリフォードの議論を取り上げながら例証しているように，バリを訪れる日本人観光客のなかには，やがてバリに移住し，観光客相手の仕事に従事するホストになり，新たなゲストを迎えるという現象がしばしばみられる〔山下 1996:155〕。移住者（移民）の実践が地域の観光文化に大きな影響を与えうることは，チャイナタウンなどの例を持ち出すまでもなくよく知られている。また，バリ観光においてシュピースが果たした役割をみれば，移住者は文化を持ち込むだけでなく，移住先の文化を解釈して表象し，地域の「伝統の創造」の触媒となりうることもわかる〔山下 1996〕。特定の観光地に惹かれそこに移住した人たちが現地の観光文化に新たな表象を加えるという現象もまた，移動が常態化している現代にあって，注目に値する

現象であるといえる。

本稿で取り上げる南伊豆は、かつて大資本のマスツーリズム開発により観光空間として確立した地域である。それからおよそ半世紀が経過し、マスツーリズムは依然として優勢であるが、大型レクリエーション施設の閉鎖が相次ぐなど制度疲労もみることができる。そしてマスツーリズムは、ツーリズムの多様化への道を開いた。その多様化の一端を担うのが、移住者たちの実践である。南伊豆には、高度成長期の観光ブームの時期から、繰り返し訪れるリピーターが存在し、中には生活の場として選ぶ移住者たちも現れていた。現在では相当数の移住者が暮らしており、移住者同士のゆるやかなネットワークを形成している。それら移住者たちは南伊豆の自然に惹かれ、友人とのつながりを頼りに移住したのだが、なかにはその後、南伊豆の自然を表象する画家になったり、あるいは友人たちや観光者が集える空間の演出を行うようになった人たちもいる。筆者は、そうした移住者たちを訪ね、その移住に至るまでの経緯や、現在の生活について聞き取りを重ねてきた。本稿は、そのなかから数名を取り上げて報告し、移住者が観光と自然表象にどう関わっているかについて検討を行う。

II. 南伊豆観光の展開―「南伊豆」空間の創出

はじめに南伊豆観光の展開の概略に触れておこう。近代的な観光地としての南伊豆の歴史は明治時代に遡る。南伊豆は伊豆半島中央にそびえる天城連峰により北伊豆から隔てられていたが、明治時代、伊豆半島の付根にある修善寺に逗留した文人俳人らにより、「南伊豆」として発見された¹⁾。

1909年（明治42年）、島崎藤村は、田山花袋、蒲原有明、武林無想庵とともに東京を出発、修善寺から天城峠を越えて伊豆半島を縦断し、石廊崎まで旅行している。その旅行を描いた紀行文『伊豆の旅』（1909）のなかで、藤村の同行者のひとり、天城峠を越えて南伊豆に下った先で日光の暖かさに「南と北とはこうも違うものかねえ」と感嘆し、藤村自身も道

端に咲く「菜の花」や「椿の花」に心をはずませ、若い男女を見かければ「その頬の色をみたばかりでも南伊豆へ来た気がした」と記している。天城峠を境に南に広がる南伊豆を、温暖で花にあふれた異空間として見いだしたのである²⁾。

この南国的な明るい南伊豆のイメージは、1926年（大正15年）に出版された川端康成の『伊豆の踊子』により、「カタルシス」という魅力を加えられ、さらに広く知られるようになる。修善寺に逗留しながら書かれたこの小説は、「孤児根性で歪んでいる」二十歳の主人公が南伊豆に向かう途上、踊子一行に出会い、踊子に「汚い考え」を抱くのだが、天城トンネルを抜け一行とともに下田に向かう道程で、踊子に対する思い違いが解消されていくにつれ、孤児根性から脱却し素直になっていき、一行と別れた後には「清々しい満足の中に静かに眠っている」ようになるという物語である。天城トンネルを抜けて明るい南に向かう道程を「〈私〉の浄化の物語」[田村 2001: 223]と重ね合わせたこの小説は、異空間としての南伊豆のイメージが確立する契機となった。

さて、藤村や川端が旅した当時、東海道からの往来が容易な修善寺や湯ヶ島などに比べ、そこからさらに南下し、天城峠を越えて南伊豆へ行くことはかなりの困難を伴った³⁾。明治30年代にようやく天城越（下田街道）が整備され、修善寺から下田へ自動車で行けるようになり、1916年（大正5年）には中伊豆の大仁と下田を結ぶバスが開通しているものの、本数は少なく、依然として徒歩による天城越えが一般的であった。昭和初期には、歴史を資源にした観光振興祭「黒船祭」が行われるようになり、またアメリカの初代駐日公使ハリスに仕えた「唐人お吉」の悲劇物語が小説や歌舞伎にされ、お吉の墓参客が訪れるようになり、天城峠を越えてやってくる観光客は徐々に増え始めた。

第二次大戦により観光は一旦途絶えたが、戦後徐々に復活していき、高度成長期の観光ブームを迎えると、南伊豆は熾烈な観光開発競争の場とな

る。伊豆半島東岸に鉄道を敷設する計画は明治時代からあったが、国鉄により伊東まで敷設されて以降、長い間頓挫していた。それがこの時期、東急グループと西武グループが下田までの敷設権を巡り「伊豆戦争」とも称されるほどの開発競争を繰り広げたのである。結局東急系列の伊豆急行がこの路線の開発権をえて、1961年（昭和36年）に下田まで開通させた。伊豆急行の開通により、下田は東京から直通列車で約3時間の日帰り可能圏内になった。またその頃には道路交通網の整備も進んでおり、すでに1957年（昭和32年）には県営の有料道路が下田まで開通していた。

こうしたインフラの整備と並行して伊豆急や西武をはじめとした大資本が沿線のリゾート開発に乗り出し、南伊豆に劇的な変化をもたらした。開港関連の史跡をもつ下田、温泉地である蓮台寺や下賀茂、白浜から下田港、弓ヶ浜、石廊崎を経て松崎にいたる海岸部の観光資源を組み合わせた「周遊型観光地」[田林 1976:8]としての南伊豆が確立していく。この時期の観光客の急増ぶりは、伊豆急行の乗客者数が開通年の1962年（昭和37年）に約344万人、1971年（昭和46年）には787万人にまで達したことから推し量ることができるだろう [ibid:8]。

このマスツーリズムを空間イメージという点で支えていたのが、藤村や川端の描いた異空間としての南伊豆のイメージである。「観光が成り立つためには、目的地についてのイメージが組織的に生産・供給されなくてはならない」[山中 1992:2-3]とすれば、特に『伊豆の踊子』が南伊豆観光に果たした役割は極めて大きい。1933年（昭和8年）にサイレント映画で田中絹代主演で映画化され、さらに戦後には1954年（主演：美空ひばり）、1960年（同：鰐淵晴子）、1963年（同：吉永小百合）、1967年（同：内藤洋子）、1974年（同：山口百恵）と、ちょうど南伊豆観光が急成長した時期に6回にわたり映画化されているのである。さらにテレビでも、伊豆急行開通に合わせるかのように1961年にNHKテレビでドラマ化され、以後1973年、1992年、1993年にもテレビドラマ化されてい



図1. 東急横浜駅に掲示された観光案内、「伊豆で湯ったり花めぐり」

る。天城峠によって隔てられた南国イメージとそこを旅することによって得られる甘いカタルシスのイメージがこのように繰り返し生産されたことは、観光空間としての南伊豆の成立に大きな影響を及ぼした。映画やドラマで踊子の清純なイメージが南国的な自然に重ね合わされていたことから、南伊豆は観光客にとって「〈私〉の浄化の物語」の舞台となっていく。

こうした「観光のまなざし」のなかで、南伊豆の観光業者や自治体は、その拠点に「花」を多用し、温暖さと明るさを備えた自然を演出するようになっていく⁴⁾。この傾向を、伊豆半島の最南端、南伊豆町にみてみよう。観光案内書の南伊豆町の頁や町の観光協会のパンフレットをみると、そのほとんどが、自然景観（石廊崎、弓ヶ浜、奥石廊、天神が原、波勝崎）や、人工的な自然（下賀茂熱帯植物園、アロエセンター、天神原植物園、七里バラ園、大瀬花狩成晃園）、自然を利用したレクリエーション施設（一条竹の子村、伊豆下田カントリークラブ、伊豆乗馬クラブ）で占められているのがわかる。また、町おこしのイベントも自然を生かしたもの

が目立つ。1968年には春の「南伊豆自然まつり」が始められ、1999年にはその一環として青野川沿いの河津桜を中心とした「みなみの桜と菜の花まつり」が、さらに2001年からは「南伊豆菜の花ツーデーマーチ」が開催されるようになった。南伊豆町の観光が自然資源に大きく依存した形態であることがわかる。それらの観光地やイベントはほとんどが伊豆急開通後に開発されたものであり、従来からあった南国的自然に「〈私〉の浄化の物語」の舞台という意味が加えられたものとみることができる。

III. 移住者たちのネットワーク―「見晴亭」の記憶

これまでみてきたように、1960年代の急激な観光ブームにより大量の人々が南伊豆地域に足を運んだ。そして、そのなかには南伊豆に惹かれ、何度も訪れるようになったり、長期滞在したり、さらには移住する人々までもが現れ始めた。都会に暮らす人々が「脱サラ」して南伊豆に移住し、たとえばペンションを開業するといったことが頻繁にみられるようになっていったのである。脱都会指向と自然への憧憬に支えられたこの動きは、

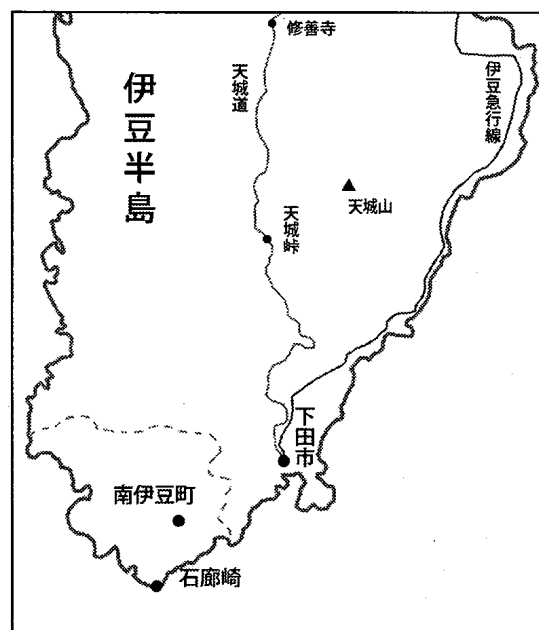


図 2.

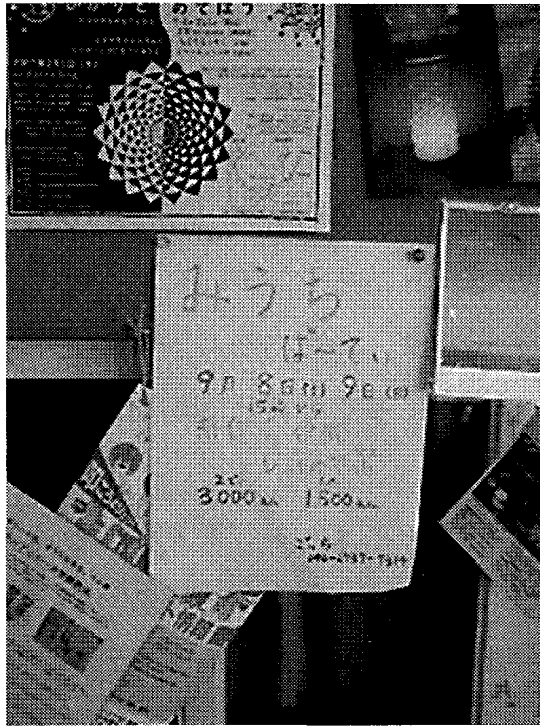


図 3. ある店の掲示板, さまざまな情報が並ぶ

いまではその規模や地域への影響という点で見過ごすことのできない勢力になっている。その動きのなかで、観光産業によって表象されてきた南伊豆の空間イメージは、それを生活の場として選んだ人たちにより読みかえられ、新たな表象を生み出していくことになる。

南伊豆町では他の多くの地域と同じように高度成長期に人口が大量流出し、現在も大勢では過疎化と高齢化が急激に進んでいる。町は 1955 年（昭和 30 年）に 6 ヶ村が合併して誕生したが、合併時の人口 16,376 人はその後ほぼ毎年減り続け、2005 年（平成 17 年）には 10,178 人にまで減少している。しかし、近年その内訳に変化が現れ始めている。1996 年（平成 8 年）から 2005 年（平成 17 年）の 10 年間をみると、自然増減はマイナス 810 人であるのに対し、社会増減はプラス 257 人（転入 3,863 人、転出 3,605 人）と増加傾向にある〔南伊豆町 2007:9〕。転入者の内訳は都市部などから帰郷する「U ターン組」が多くを占めるはずだが、一方で相当数の「I ターン組」も含まれていると考えられる 5)。

実際に広い町内を巡ってみると、個性的なレストランやショップをいくつもみつけることができ、聞いてみるとそれらを経営したり働いたりしているのは移住者であることが多い。地域の人々の店舗や観光業者の手による店舗と、そうした移住者による店舗には何かしら違いがあるようにみえる。ある店の店内には掲示板があり、そこにはフライヤー（チラシ）が貼られ、音楽イベントの告知や店の案内から、猫の貰い主探しまで、さまざまな情報が掲示されている。多くの移住者がおり、ネットワークをつくっていることがわかる。

こうした移住者の増加とそのネットワーク化の動きは、マスツーリズム全盛期の1970年前後にまで遡ることができる。いまでは移住者たちにより半ば「伝説」のように語られるようになっている「見晴亭」が、その原点のひとつである。

南伊豆町で最もよく知られた海水浴場である弓ヶ浜から、海岸沿いの県道を石廊崎に向かうと、いくつか入り江の小集落を越えた先に見晴台というバス停がある。海に突き出た岬からは、その名のとおり太平洋の大海原を見晴らすことができる。道路沿いに空き地があり、その際に半ば周囲の木々に覆われ朽ちかけた木造の建物が佇んでいる。入り口の上には「見晴亭」とかかれた看板がかかっており、また「お食事処、おみやげ」ともあり、かつてそこが観光客向けのドライブイン店舗であったことがわかる。

2007年現在、この見晴亭の元店舗に出入りしているのは藤田ハメ氏だけである。藤田氏は1944年生まれで2007年現在62歳、白髪混じりの長髪を頭上でくるりと丸め、鉛筆を挿して結わえている。日焼けした顔と、笑ったときに見せる白い歯が印象的である。ほぼ毎日この見晴亭の元店舗にやってきて、机や椅子、棚などを制作しているという。大きな木材を切り出して組むのではなく、山で拾い集めた枝や端材を、その形を活かすように丁寧に加工し組み上げていく作業であり、木の形状、木目の流れや色の組み合わせが、独特のデザインを生み出している。かつてのドライ

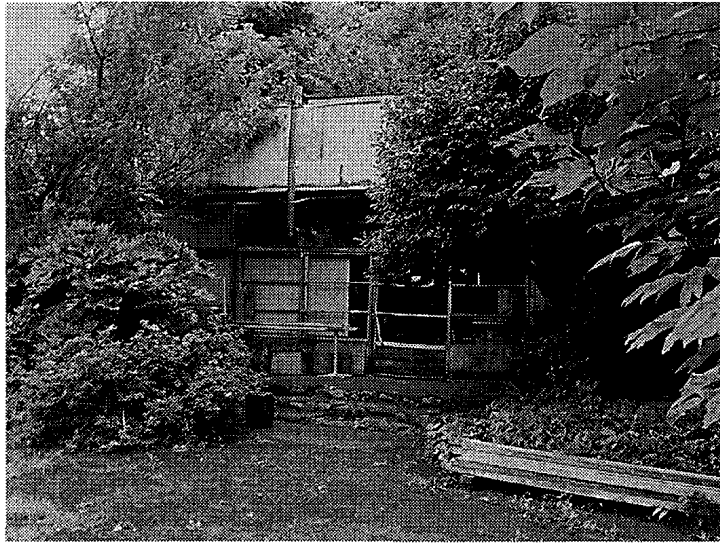


図 4. 見晴亭

ブイン店舗を利用した工房の棚には、鋸や鑿など、木工具がきれいに並び、古いオーディオからはジャズが流れる。

1990年代後半まで、見晴亭店舗の周囲にはいくつもの小屋が建ち並び、さまざまな若者たちがやってきて暮らしていた。なかには外国人もあり、「ヒッピー・コミューン」のような雰囲気があったという。見晴亭の店舗は故平山敏郎夫妻が営んでいた。長年船大工として各地を転々としながら暮らしていた平山氏は、1970年頃に定年で南伊豆に戻ると、見晴亭の周りに拾い集めた廃材や山の木材をつかって6畳一間ほどの小屋を建て始めた。最初にアメリカ人の若者がそれを借りたいと申し出て、以降たくさん若者がやってきて暮らし始めた。どの小屋も家賃は一畳あたり月1,000円だった。年に1棟ほどのペースで建て続けた結果、約20棟ほどの小屋が並び、その周囲には「住民」が野菜をつくる畑が広がっていた。

藤田氏が見晴亭の周りの小屋で暮らし始めたのは1970年代後半、30代の頃である。北海道生まれで、学生運動やヒッピー運動がおさまりかけたころに東京のレコード店やジャズ喫茶で働き、まだ珍しかった民族音楽

喫茶を開業し、インドやアフガニスタン、アラビアの音楽を聴かせていた。インドやネパールを旅したこともあり、自らもシタールを演奏する。30歳のころ結核に罹り2年半ほども入院したが、そのことがその後の生き方を変える転機になった。病院で外泊許可がでたときに友人に連れられて南伊豆を訪れ、その友人と見晴亭を訪れて気に入り、その場で小屋を借りてしまったのだ。退院後さっそく移住し、ほとんど独学で、内装や家具を手がける職人になった。

さて、見晴亭に集まる若者たちは平山氏以外の地域の人とはまったくといっていいほど接触がなかったが、あるできごとを契機に近隣の大瀬集落の住民から圧力を受けるようになった。1990年頃、見晴亭の周囲にあった小屋のひとつがローソクの火の不始末から火事をだし、隣接する数軒の小屋を焼失させてしまったためである。平山氏の尽力で見晴亭はなんとか存続したものの、1996年（平成8年）に平山氏が90歳で亡くなると、1年の猶予を与えられ全員退去することになった。

藤田氏は大瀬集落の人たちが小屋を取り壊すのを手伝ったが、そのときに気に入られ、ただひとり見晴亭の店舗を工房として使うことを許された。住居を他に借り、以後昼間だけ見晴亭をアトリエに木工をしている。小屋のなかにはいまだ残っているものもあり往事を偲ばせるが、ほとんどは取り壊され跡地には草木が茂っている。

1960年代から70年代にかけて石廊崎観光はピークを迎えている。1963年（昭和38年）には年間329万人が石廊崎を訪れたというから、毎日平均1万人弱もの人々が石廊崎に向かったことになる〔田林 1976: 9〕。見晴亭はその石廊崎に向かう海沿いの幹線道に面していた。藤田氏のようにそこに定住する者もいれば、休日に訪れ、2、3日滞在していく者もいたが、共通していたのは彼らがみな南伊豆の外からやってきたよそ者であったことである。観光に訪れた際にたまたま通りかかって見つけた者もいたが、一方で南伊豆にそのような「村」があるという噂が口コミで広

がっており、藤田氏のように友人づてに知って訪れた者も多かった。よそ者の彼らが南伊豆に住むことが可能になったのは、平山氏という地域とよそ者を結ぶ媒介者がいたためである。平山氏自身、長年南伊豆を離れて暮らしていたため、地元に戻ったもののうまく馴染めず、小屋をつくることで気分を紛らわせていた。藤田氏ほか、見晴亭に暮らしたことがある人たちは、来る人は拒まず、誰にでも格安で小屋を貸す「おじいちゃん」こと平山氏の人柄に惹き付けられたという。住人の多くが小屋をつくる平山氏をまねて自分でも小屋を改修し、さらには物づくりをするようになるほど、「おじいちゃん」の影響力は大きかった。

一方、見晴亭に集まる人たちのあいだで、横のつながりもでき始めていた。ただし、一見ヒッピー・コミュニンのような様相を呈してはいたというものの、内部は思想的にまとまったものではなく、南伊豆の自然と平山氏を慕う隣人たちのゆるやかなまとまりだった。2007年現在、見晴亭に出入りするのには藤田氏だけであるが、かつて見晴亭の小屋に滞在したことのある人たちのうち何人かは、いまま南伊豆地域に暮らしている。彼らを南伊豆に留め続けているのは、「おじいちゃん」の記憶、移住者たちのネットワークと、その自然である。見晴亭に始まるこうしたゆるやかなネットワークの特質は、その後増えていった移住者同士の関係にもみることができ。

IV. 移住者たちの自然暮らしと絵画

南伊豆に移住した人たちがその移住の動機としてまず挙げるのが、温暖で豊かな自然に恵まれていることである。そのため彼らは集落から離れて山の中に居を構え、自然にできるだけとけ込んだ生活を営もうとするが、それを実現した暮らしはじっさいのところ容易ではない。周囲の自然環境と共生するためには、多くの実際的な知識と技術が必要とされるのである。しかし苦勞を重ねながらのそうした暮らしは、いつしか芸術的な創造

へとつながっていく。以下では、移住した後に絵を描くようになった二人の人物を紹介しながら、自然暮らしと芸術的な創造の関係について考えてみたい。

1 「ギャラリーまじっくらんど」—くぼやまさとる氏

くぼやまさとる氏は、海から離れた山間の集落、一条からさらに 800 m ほど登ったところにある、ゆるやかに開けた谷間の古民家にひとりで暮らしている。家に向かう道沿いを流れる川に沿って棚田の跡があり、聞けばそこで野菜を育てているという。野菜づくりが得意でかつては売るほど穫れたが、いまでは自分が食べるものだけつくっているそうだ。家に入るとそこは「ギャラリーまじっくらんど」のエントランスであり、まばゆい緻密な水彩画が広がっている。ギャラリーの奥には台所、居間、アトリエなどがあるが、どこも彼が自ら使いやすいうように改修してある。家の内部は入居したときとはまったく別の空間になっているという。大工仕事は好きではないというが、母屋の改修をただけでなく、湧水を沸かして入る五右衛門風呂の浴室小屋をはじめ、小屋をいくつか建てたり、パンを焼くための石窯をつくったりもしている。それらの材料のほとんどが周囲の山から集められたものだ。さらに、2006 年から新たに 2 階建てのギャラリーを建設し始めている。山奥にひとりで暮らしているながらギャラリーをもっているだけでなく、伊豆や首都圏で頻繁に個展を開き、また自らウェブサイトで作品を紹介し作品やポストカードの販売を行うなど、画家として活発に活動している。

くぼやま氏は 1956 年東京郊外生まれで 2007 年現在 51 歳、子供の頃から昆虫と絵が好きで、東京農業大学を卒業している。学生時代にロック喫茶で読んだミニコミ誌で自然農場について知り、ヒッピー風の農場を何ヶ所か回ったという。やがて伊豆七島のひとつ御蔵島にたどり着き、集落から離れた海辺で友人とふたり、ほぼ自給自足の暮らしをしていたが、

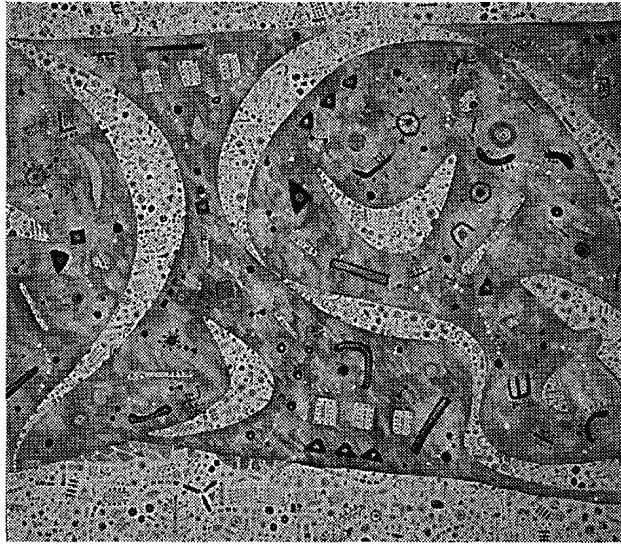


図5. くぼやま氏の作品「Wind Legend」2007年

やがて友人が去り、しばらくひとりで暮らしていた。島のある老人から自然について膨大な知識を授かったが、島と南伊豆の自然環境が似ているため、今でもその知識が役立つことが多いという。島の生活に飽き、東京に戻りサラリーマンをやったものの、楽な半面もの足りず、やがて友人が住んでいた南伊豆の現在の家に移住した。一時は8人で住んでいたこともある。ある大雨のとき土石流で家の半分が流され、2年かけて自ら家を改築し、その際にアトリエもつくった。

絵を描き始めたのは、1989年（平成元年）にオーストラリアを旅行した際、アボリジニの絵を観て強い衝撃を受けたことがきっかけだったという。1992年（平成4年）に個展を開催したところ評判がよく、また1993年（平成5年）に東京のエコロジーショップと共同出資でポストカードをつくったところ飛ぶように売れ、それ以来、画家として生計を立てるようになった。また、恐竜タイナの旅をえがいた絵本『タイナ』（遊タイム出版 2002 文：長井理佳）の絵を担当している。

できることはできるだけ自分でやり、つくれるものはみなつくる、それが楽しいとくぼやま氏はいう。本格的に絵を描き始めたのは15年ほど

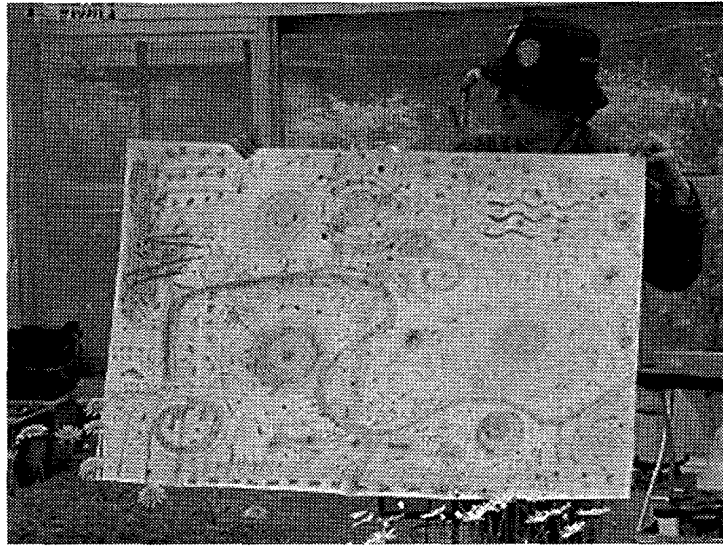


図6. 町内のイベントでライブ・ペインティングを行うくぼやま氏（写真提供：佐藤工房）

前、彼が30代後半のころである。それまで続けていた山中の生活のなかで、さまざまなものをつくることの喜びを見だし、そこから「描く」という表現方法に再び巡り会ったといえるかもしれない。自身のブログのなかで、かつて御蔵島で暮らしていた頃、時間をたっぷりかけて「背負子」をつくったことについて記している。「とにかく、なんであれ何かを作って表現したかったのです。私にとっては実用品というより作品です。昔の人はなんでも自分で作ったわけですが、それによって表現欲求はかなり満たされたのではないのでしょうか？」。

自然のなかでの暮らしで、くぼやま氏が特に惹かれるのが、昆虫の世界だという。2006年（平成18年）に開設されたブログは、新作の発表、作品展の告知、自然暮らしの知恵などについて綴られているが、なかでも「虫日記」が充実している。美しい昆虫写真、そして審美眼と愛情に満ちたその観察日記から、虫たちから受ける靈感の大きさが伝わってくる。彼の絵のなかには、草木やそこに棲む小さな虫たちをおとぎ話の世界であるかのようにデフォルメして描いているものがたくさんあり、メルヘンのような緻密で優しい世界が広がる。

くぼやま氏は後述の平島氏とともに、自宅の裏山などを案内するツアー「まじっくらんど自然塾」の案内人もしている。山に入ると、草木やそこに生息する昆虫の美しさを少年のように語り、豊富な知識を活かしてその種類や生態を詳しく説明する。また、山の抱える問題、すなわち林業の衰退による荒廃や竹林の増加についても、自身の体験に基づき指摘する。くぼやま氏によれば、自分は専門家より昆虫の知識は少ないがふつうに暮らしている人に比べたらずっと知っていることがわかってきて、これは伝えていかなければならないと思ったのだという。また「自分がここでやりたいことは、人の中の子どもの感覚を呼び覚ますことなのだと気がついた」ともいい、2007年（平成19年）には「夏休みエコ・アート教室」としてそれを実現している。

2「平太屋」―平島平太氏

平島平太氏は、見晴亭にほど近い海辺の集落、下流のはずれの狭い谷を登ったところに、妻子と4人で暮らしている。鬱蒼とした草木の合間に小さめの母屋があり、そのほかに南国を思わせる高床式の小屋が2棟と風呂小屋がある。これら3棟の小屋は平島氏の手作りだという。周辺の照葉樹の山から切り出した木を骨組みに使い、屋根には竹を半割りにして葺き、壁は竹を組んだものである。浴室小屋には、庭にあった井戸の隣に五右衛門風呂の釜を据え、モルタルと土で固めている。

1961年（昭和36年）三重県生まれで現在（2007年）46歳、東京都、埼玉県で育つ。早稲田大学に進学するが、3年の時にインド旅行に行つて衝撃を受け、「こんなことしてる場合じゃない」と大学を中退、1年半をかけてインド、ネパール、パキスタン、タイを旅した。日本に帰ると「逆カルチャーショック」で日本に馴染めず各地を転々とし、1987年（昭和62年）、26歳のときに南伊豆に移住する。最初に借りた家にはガスや電気がなく、畑を耕しながら、自給自足に近い暮らしをし、土木や大工仕事



図7. 平島氏が受注し仲間たちと建てた小屋，屋根は半割の竹を組んでいる

のアルバイトで現金収入を得ていた。1995年（平成7年），ある出来事から発起して絵を描き始め，それを自分でも気に入ったことから，その後も絵を描き続けているのだという。

下田駅駅舎，観光ホテル，熱帯植物園など，南伊豆の観光施設内にある土産物店には，平島氏の絵はがきがよく置かれている。1996年（平成8年）頃から絵はがきをつくり，1998年（平成10年）には東京西荻窪のほびっと村で，1999年（平成11年）には南伊豆町で個展を開催，その後も個展や展覧会出品を重ね，次第に知られるようになっていく。1998年（平成10年）には町内の茅葺屋根の民家を借り，ギャラリー「平太屋」を開設した。2001年（平成13年）には，南国風の暮らしを描いた詩画集『サンシャインな暮らし』（スタジオリーフ）を，2005年（平成17年）には，友だちを訪ねる冒険物語絵本『チャイくんはいく』（福音館書店）を出版している。自身のウェブサイト運営もしており，こうした活動の記録や作品を掲載しているほか，通信販売も行っている。

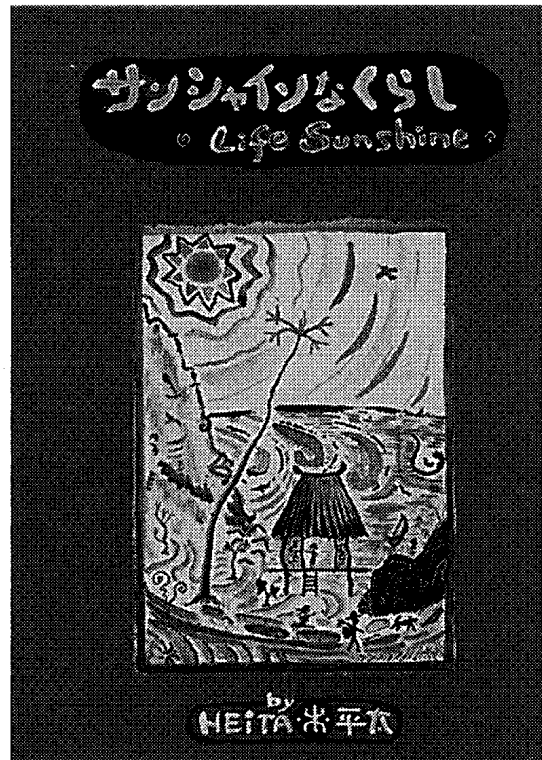


図8. 平山氏の絵と詩と物語「サンシャインなぐらし」(2005 スタジオリーフ)

平山氏の描く絵には、南国風の自然風景とそこに暮らす人や生き物をモチーフにしたものがしばしばある。木々や波を描くときの躍動する曲線と奥行きのある色づかいは、自然のなかでの暮らしからそれらの絵が生まれていくことをうかがわせる。そしてやはり、絵に描かれている小屋は平山氏自身が建てる小屋によく似ている。自宅に建てた小屋の他、2006年には「南風工房」を立ち上げ、依頼を受けていくつもの小屋、門、店舗の看板などを制作している。それらもまた、山や海辺を歩き集めた素材をふんだんに用いたもので、周囲の自然のなかにとけ込んでいる。

平山氏はこうした制作活動のほか、くぼやま氏とともに「まじっくらんど自然塾」のガイドをし、また自ら「秘境ツアー」と題した個人ツアーを企画している。これは、平山氏が南伊豆の自然のなかでも特に好んでいる、あまり知られていない海辺の浜や山中の滝を訪れるもので、道中平山氏は周囲に生えている草木について、それがどんな性質があるのか、また

どんな用途に使えるのか、といったことについて紹介していく。海の秘境ツアーでは、森を抜けて浜にでると、シュノーケルを装着して潜り、カサゴなど磯の魚や、鮮やかな色彩の魚など、豊かな海の自然を楽しむ。

3 自然素材のものづくりと絵画

くぼやま氏と同様、平島氏もまた近隣の山々から集めた素材によって住居空間を自らの手でつくりあげる。自宅の小屋の場合、道具代を除くとかかった経費は、4.5 畳の小屋で 8,000 円、10 畳ほどの 7 角形の小屋で 5 万円だけだという。こうした、身の回りの自然素材を用いて生活空間をつくりあげる作業は、見晴亭の「おじいちゃん」こと平山氏にその原型をみることができる。平山氏は船大工として各地を転々としながら暮らし、定年で伊豆半島の南端に帰ってきたあと、毎日のようにリヤカーを引いて歩き、廃材や山の木材を集めてはそれらを器用に組み合わせ、小屋を次々と建てていった。釘ですら、廃材から抜いたものを使ったという。その作業は、レヴィ＝ストロースのいう「ブリコラージュ」（器用人仕事）を思わせる。ブリコラージュを行うブリコルールは、エンジニアと違い、雑多でまとまりのないもちあわせの道具と材料の集合により、多種多様な仕事をする人とされる [レヴィ＝ストロース 1976:23]。小屋づくりは平山氏にとっては「道楽」だったが、そのブリコラージュの手法は見晴亭に出入りする人たちに多かれ少なかれ影響を与えたに違いない。そして藤田氏は木工へ、くぼやま氏と平島氏は小屋づくりや絵画へと、それぞれ个性的に展開させていった。レヴィ＝ストロースはまた、美術家というものがブリコルールと科学者の中間に位置するとも述べているが [ibid:29]、そうした点からみると、くぼやま氏や平島氏は、日頃からブリコラージュ的な実践を行うなかから、絵を描くという美術的方法へ手を広げていったとみることができるだろう。

さらに、くぼやま氏や平島氏はものづくりをブリコラージュ的行って

いるだけでなく、生業あるいは経済のあり方もまたブリコラージュ的である。そのなかで絵を描くことはやはり大きな比重を占めるが、その絵のための額縁づくりをし、絵の営業・販売もしている。そして、自然暮らしで得た知識を活かし、「まじっくらんど自然塾」あるいは「秘境ツアー」のような、観光に関わる仕事をする。平島氏の場合、さらに「南風工房」として小屋も建てる。もちあわせの能力を器用に組み合わせ、多種多様な仕事を行っているのである。そもそも彼らの場合、生活の多くの部分がブリコラージュ的に成立しており、そこから個性が生まれて芸術作品に結実したり、さまざまに組み合わせた経済活動に結びついたりしているといえるだろう。

V. スピリチュアル空間の演出

南伊豆への移住者の活動には、いわゆるスピリチュアリティ文化と関係あるものがしばしばみられる。くぼやま氏が東京御茶ノ水のエコロジー・ショップと共同でポストカードを制作し、また平島氏はカウンター・カルチャーの砦ともいわれる東京西荻窪のほびっと村で個展を開催するなど、南伊豆への移住者たちの活動はしばしばスピリチュアリティ文化と関係をもっている。

そもそもスピリチュアリティとはなんだろうか。ここでは伊藤雅之による定義を参照しておこう。すなわち「おもに個々人の体験に焦点を置き、当事者が何らかの手の届かない不可知、不可視の存在（たとえば、大自然、宇宙、内なる神／自己意識、特別な人間など）と神秘的なつながりを得て、非日常的な体験をしたり、自己が高められるという感覚をもったりすること」[伊藤 2003: ii]である。また、スピリチュアリティ文化の源流は、1960年代の欧米におけるカウンター・カルチャーとそれに続くニューエイジ、1970年代後半以降の日本における精神世界などにあり、昨今では主流文化にも浸透しつつある。次にみていくのは、こうしたスピ



図 9. ワンネスホール

リチュアリティとその文化をより自覚的に実践し、それを空間表象として実現している二人である。

1 「テラ・憩いの里」—金子晶子氏

金子晶子氏は、キャンプ場とイベント施設を併設した「テラ・憩いの里」のオーナー経営者である。南伊豆町を流れる青野川沿いの下賀茂から 1 km ほど山に入った先に入り口があり、笑顔の金子氏が迎えてくれる。1937 年（昭和 12 年）生まれで 2007 年現在 70 歳、夫は東京で暮らしており、夫の母親と二人暮らし、男性 2 人が住み込みで働いている。2.3 万坪の敷地にテントサイト、アウトドアキッチン、バンガロー、広場などキャンプ場としての標準的な施設を備えているほか、ホール、ティピ・テント、炭焼窯など、人が集まりイベントを開催したり体験型の滞在をするための施設も充実している。

体験ツアーの内容は 4 タイプに分けられ、収穫体験（竹の子狩り、山菜狩り、しいたけ狩り、栗拾い）、学習体験（炭焼き、燻竹、竹細工、塩作り、森のクラフト、自然キャンプ）、農林作業体験（自然散策路作り、

草刈り、花植え）、自然観察体験（森の遊び体験、ネイチャーゲーム体験）などである（静岡県グリーン・ツーリズム協会のパンフレット、「しずおか GREEN TOURISM」より）。また、たとえばワンネスホールと名づけられた24角形のホールでは、ピアノ、リコーダー、社交ダンス、ベリーダンスのイベントのほか、絵画展も開催するなど、芸術を志向したイベントも行っている。

こうした金子氏の実践は、「スピリチュアルな価値」への強い信念に支えられている。「テラ・憩いの里」を始める前からスピリチュアルなものに関心を抱いており、ラテン語で「大地」を意味する「テラ」を名前に掲げ、施設にも南伊豆の自然との共生を願いシンフォニーハウス、ハーモニーハウス、ワンネスホール、テラファームなどと名づけた。1990年代半ばにスコットランドのフィンドホーン共同体へ視察に赴き、1998年（平成10年）ジャック・マイヨールが来日した際にはテラに招くなど、海外のニューエイジやスピリチュアリティの動向に関心を寄せ、交流している。

こうした「スピリチュアルな価値」への関心は、父の影響を受けて形成されたのだという。金子氏の父は技術者として旧満州に渡り、金子氏はそこで生まれている。お茶の水女子大で地理学を学び、長年にわたり東京の高校・中学で地理の教師をしていた。戦後、父親は東京で会社員をしていたが、高度成長期の日本をみて疑問を抱き、1968年（昭和43年）武者小路実篤の「新しき村」を自らつくろうと、現在「テラ・憩いの里」のある土地を仲間と共同で買い、会社勤めを続ける傍ら、椎茸栽培を主とした農業を始めた。20年ほどそれを続け、完全に移住しようとした矢先、癌で倒れ他界した。そのときに晶子氏は父の遺志を継ぐことを決意し、教師をやめ移住した。当初、父に倣い椎茸づくりを試みたものの、重労働と椎茸の市価下落のため断念。長年教師をしていた経験をもつ金子氏は、今度は実践を通して教えてみたいという動機から多目的キャンプ場をつくろう

と考え、1988年（昭和63年）からキャンプサイトとティピテントを皮切りにさまざまな施設をつくっていったのだという。

「テラ・憩いの里」では移住者が協力してイベントをつくることがしばしばある。2006年（平成18年）に開催されたレイヴ「Dance for Peace」には筆者も参加したが、それは移住者たちが多くの部分で運営に関わったものであった。前述の平島氏らが木や蔦を組んで入り口ゲートをつくり、後述の牧野氏がワンネス・ホールでクリスタルボウルを演奏したほか、移住者のミュージシャンがバンドを組んで演奏したり飲食ブースを出店したりするというように、移住者たちが協力してイベントをつくりあげていた。

2 「くりすたり庵」―牧野持侑氏

牧野持侑氏は、南伊豆町の西部、松崎町に近い山中に妻子と3人で暮らしている。自宅敷地内につくられたヒーリングスペース「くりすたり庵」は、照葉樹の雑木林に囲まれており、すぐ目の前に沢には湧水が流れる。一帯はその沢の水を用いた棚田の跡であるといい、苔むした石垣と小さな田の跡が斜面に連なっている。「くりすたり庵」の建物と家屋はまだ新しく、どちらも天井の高い開放感のあるつくりになっている。

牧野氏はクリスタルボウルによるヒーリングによって知られており、2006年（平成18年）には北海道から九州まで、全国で50回近く演奏を行っている。クリスタルボウルは、仏教の法具である鈴（りん）に由来する。主にチベット仏教経路でシンギング・ボウルという呼称で欧米に知られるようになり、それがクリスタル（水晶）でつくられるようになったのがクリスタルボウルである。その由来のためか、東京芝の増上寺や、京都の法然院など、仏教寺院から演奏を依頼されることも多い。ボウルの縁に沿ってりん棒でさすると、ボウルに共鳴して「倍音」（周波数が基音に対して2以上の整数倍になっている音の成分）を発し、さするのをやめて

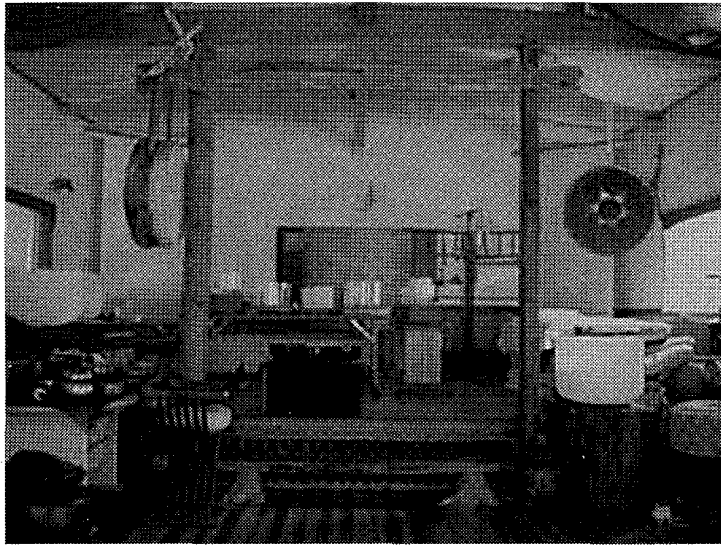


図 10. くりすたり庵内部，正面ステージを臨む

も倍音が残響し続ける。牧野氏によれば，この独特の振動が人の身体に癒しをもたらすとして，近年「音響療法」のひとつとして注目されるようになってきているという。

牧野氏がクリスタルボウルに出会ったのはカリフォルニアのニューエイジ・ショップだった。1950年（昭和25年）熊本生まれで2007年現在57歳，1974年から96年まで北カリフォルニアにて暮らし，マクロビオティック・レストランのシェフを務めるなどニューエイジ的な世界観に傾倒し，それを実践していたなかでの出会いだった。1996年（平成8年）に帰国し，本格的にクリスタルボウルや民族楽器によるコンサート活動やCD制作（「倍音浴」（ピンポイント 2005），「睡眠浴～倍音浴2」（ピンポイント 2007））に打ち込み，音響ヒーリングの研究と実践をはじめた。最初に南伊豆を訪れたのは1987年頃に一時帰国したときであり，そのときに見晴亭も訪れたという。自然環境がよいことと友人関係のつながりがあったことから帰国後の1998年（平成10年）に南伊豆に拠点を移し，2003年（平成15年），現在の場所に「くりすたり庵」を開いた。

牧野氏が自身のヒーリングに適した空間をイメージしてつくったのが，

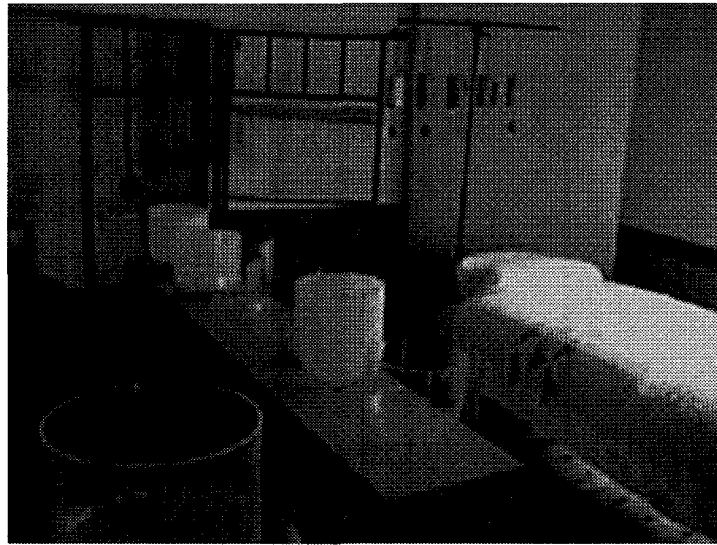


図 11. くりすたり庵内部, クリスタルボウルとヒーリング用ベッド

この「くりすたり庵」である。庵はコンサートもできるように一段高いステージと客席に分かれており、ヒーリングはステージ上に設置されたベッドに横になって受ける。筆者もこのヒーリングを受けた。ベッドの周りにはクリスタルボウルやアルケミーボウル（クリスタルに金銀など貴金属やルビーなど宝石を混ぜてつくったボウル）など、大小さまざまなボウルが置かれている。横たわり目を閉じるとボウルが響き始める。耳で聴いているというより身体全体が振動に包まれて奥のほうまで共振し、微細な波に洗われているようである。螺旋型の響きが幾重にも重なり、上昇していくようでも下降していくようでもある。身体の右側に多くのボウルが置かれており、振動はおもに右手から響いてくる一方、左手は窓に近く、目を閉じていても光を感じるとともに、沢の流れや鳥のさえずりが聞こえてくる。左手に感じるこの光と響きが、現実世界とのつながりを心地よく保ってくれる。足の間、次いで下腹の上にボウルが置かれ、ボウルの振動が身体に直に伝わり始めると、やがてクライマックスを迎える。

牧野氏のクリスタルボウル演奏は全国で聴くことができるが、ヒーリングとしては「くりすたり庵」で行われるものがおそらくもっとも上質であ

る。南伊豆のなかでも最奥地といえる自然に囲まれてこのヒーリングを受けることは、それを好む人にとっては、おそらく至上の体験になりうる。

3 スピリチュアリティの空間

金子氏と牧野氏の南伊豆における実践には、スピリチュアリティ文化との関連を明確に見いだすことができる。金子氏は「新しき村」をつくろうとした父親の遺志を継ぎ「テラ・憩いの里」を開いており、フィンドホーン共同体に視察に赴いてもいる。また牧野氏は20年以上にわたるカリフォルニアで生活するなかでクリスタルボウルに出会い「くりすたり庵」を開いており、カリフォルニアのニューエイジ思想の流れを汲んでいる。ふたりが、日本はもとより海外のニューエイジやスピリチュアリティの文化の動向にも目を向け、そうした動向のなかに自らの実践を位置づけていることがわかる。

空間表象という点からみると、「テラ・憩いの里」と「くりすたり庵」はスピリチュアルな体験ができるよう意図されたものであることがわかる。観光客として個人の選択でそこを訪れ、「テラ・憩いの里」ではティピテントに宿泊しながら炭焼きをする体験を通して自然との「つながり」を感じるかもしれないし、「くりすたり庵」では身体が倍音に共振するなかで、抑えこんでいた葛藤とその解決の道に「気づく」かもしれない。むしろ体験の内容は個人により異なるが、南伊豆の山奥という自然環境、そしてティピテントのような施設やクリスタルボウル・ヒーリングといったスピリチュアリティ文化的な装置により、その体験は一定程度方向づけられているのである。

また、スピリチュアリティ文化は組織よりもネットワーク型のつながりや個々人の選択性を重視するといわれるが[伊藤 2007: 223]、こうした点から特徴をひとつあげておくとすれば、「テラ・憩いの里」や「くりすたり庵」が、南伊豆におけるスピリチュアリティ文化ネットワークの結節

空間となっていることがあげられる。しばしばそこではイベントが開催されるが、そのイベントの多くは金子氏や牧野氏をはじめとした移住者や観光者たちが協力して準備を行い、音楽などをとおして場を盛り上げ、互いに交流するものである。このようなイベントのあり方は、組織的でなくネットワーク型とされるスピリチュアリティ文化に親和性の高いものであるといえるだろう。

VI. おわりに

現代における観光の特徴のひとつは、その多様化にある。もちろんマスツーリズムによる人の移動はひとつの大きな流れとして続いており、旅行代理店や旅行案内書が再生産を続けるイメージは、観光空間の大まかな枠組みを規定している。明るく暖かい異空間という南伊豆のイメージがおよぼす影響は現在も大きい。しかし同時に、「見晴亭」の事例にみられるように、マスツーリズムは画一的な空間イメージを差異化する動きにたいして開かれてもいた。寄り道し横道に逸れていく観光者たち、ブリコラージュ的に生活を構成し空間表象を行う移住者たちは、そのことを示している。個々の空間イメージ差異化の動きは非常に多様であるが、大きくまとめるとすれば、マスツーリズムという「近代的パースペクティブ」にたいする「脱近代的なパースペクティブ」[伊藤 2007: 225]に基づくものとすることができるだろう。

本稿で取り上げた移住者たちの事例をみると、その多くが旅を繰り返していることがわかる。彼らは南伊豆空間への移住者であると同時に、いまだ旅の途上にいるようでもある。実存を賭けて移住したというより、旅先で居心地のいい宿をみつけて居着いたような身の軽さがある。旅を続けながら同好のネットワークをつくり、再び個の世界に立ち返って表象を行う。移動を常態にしつつ、いまこの空間に奥行きを見出だし、それに身をもって関わり、創造していくという生き方をそこにみることができる。

これまでの諸前提では、真性な社会存在は、境界を画定された場所のなかで中心に位置づけられるか、位置づけられるべきだと考えられた……。居住は集団生活のローカルな土台で、旅はその補足と考えられた。だが、もし、……旅がこれまでの枠組みから解放され、それが複雑で広くゆきわたった人間経験の一部とみなされるなら、どうなるだろうか？ そのとき、転地という実践は、たんなる場所の移動や拡張ではなく、むしろ多様な文化的な意味を構成するものとして考えられるかもしれないのだ[クリフォード 2002:12]。

こうした流動する状況をより加速させているものとして、最後にインターネットを取り上げておこう。本稿でみてきた移住者たちのうち、くぼやま氏、平島氏、金子氏、牧野氏はウェブサイトを経営し、観光のホストとしての活動の多くをウェブ上で行っている。彼らを訪れる観光客の相当数は、展覧会や演奏会を訪れ、ウェブサイトで彼らの活動や住所を知ったうえで、あるいは直接ウェブサイトを見つけて、あらかじめメールでやりとりしていると考えられる。観光案内書などのマスメディアで再生産が続く観光空間とは異なる、インターネットを介した個人の選択に基づく観光空間の編成をみることができる。

山中で自然にとけ込むように生活しながらその自然を表象することと、その表象を現代的なインターネット空間を介して配信することの組み合わせは示唆的であろう。彼らは都市的生活からドロップアウトして山中に隠遁したわけではなく、山中で描いた絵画をもって山を下り個人的なネットワークを介して都市で展覧会もすれば、ブログにイベント情報を書き込んで人を呼び集めもする。人的なネットワークやインターネットの使い方次第で、山奥は世界にたいして容易に開かれることがわかる。

[付記]

調査にあたっては、本稿に登場していただいた方々の他、下田市役所、南伊豆町役場、南伊豆町観光協会、そして南伊豆町在住のたくさんの方々のお世話になった。ここに謝意を表したい。

註

- 1) 海路は近世以降開けていた。南伊豆沿岸に点在する港は優れた風待ち港として知られており、特に下田港は海上交通の要衝として栄え、明治以降、汽船会社による航路が確立した。
- 2) 藤村の旅行のクライマックスは「伊豆の南端を極める」ことであった。いざ石室崎（石廊崎）に立った藤村は、深い海を見下ろして「急激な、不思議な戦慄」が身体を伝い、「何となく底の知れない方へ引き入れられるような気がした」という。藤村にとって南伊豆は、北伊豆と対置される南国的な温暖さや明るさにあふれた地である一方、もうその先がない「半島の絶端」、終末の地でもあった。
- 3) 高度成長期以前にまで遡ると、南伊豆は交通の不便さのため開発の手の伸びない、「半農半漁」の暮らしを営む地域だった。南伊豆の沿岸集落は、共同体的な組織を基礎として、集落の周囲の海域から山域までの多様な環境資源を利用し組み合わせるといふ生産性の低い比較的同質的な農漁家からなりたっていた[尾留川, 山本 1]。この共同体は、伊豆急行開通の頃を境に急速に崩壊し、外部資本による開発の増加と、民宿経営の増加により、集落の生態は著しく変貌したという。
- 4) 南伊豆町の経済は観光産業に大きく依存している。2005年（平成17年）の就業人口は4,829人、その産業別構成比は農林漁業である第一次産業が15%、第二次産業が14%であるのに対し、第三次産業は71%を占め、そのうちのサービス業のみで47%を占める（国勢調査に基づく南伊豆町2007:11）。
- 5) 近年南伊豆町では移住者の増加に着目し、移住を促進しようとする動きが起きている。2007年には町が『みなみ伊豆町へ行こう！—交流居住を目指す方へ南伊豆町のデータ』という冊子をつくり、「田舎暮らし」の案内や、移住のためのノウハウ、地域情報、就農ガイドなどを掲載している。ただし、促進のための助成制度や優遇制度はまだ検討段階である。

参考文献

- 伊藤雅之 2003 『現代社会とスピリチュアリティ』 溪水社.
- 2007 「社会に拡がるスピリチュアリティ文化 —対抗文化から主流文化へ—」 張江洋直, 大谷栄一 (編), 『ソシオロジカル・スタディーズ』 世界思想社, 219-239.
- クリフォード, J. 2002 『ルーツ—20世紀後期の旅と翻訳—』 (毛利嘉孝ほか訳), 月曜社. Clifford, James., *Routes: Travels and Translation in the Late Twentieth Century*. Harvad University Press, 1997.
- レヴィ=ストロース, C. 1976 『野生の思考』 みすず書房. Lévi-Strauss, Clande., *La Pansée Sauvage*, Paris; Plon, 1962.
- 松田 素, 古川 彰 2003 「観光と環境の社会理論」 古川 彰, 松田素二 (編), 『観光と環境の社会学』 新曜社, 211-245.
- 尾留川正平, 山本正三 (編) 1978 『沿岸集落の生態』 二宮書店.
- スミス, V. L. (編) 1991 [1989] 『観光・リゾート開発の人類学—ホスト & ゲスト論でみる地域文化の対応—』 (三村浩史監訳) 勁草書房. Smith, Valene., (ed.) *Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism*, Philadelphia. University of Pennsylvania Press, 1989.
- 田林 明 1976 「観光地化に伴う沿岸集落の変貌 —南伊豆・石廊崎の事例—」 『経済地理学年報』 22 卷 1 号, 1-19.
- 田村充正 2001 「『伊豆の踊子』 試論 —虚構のカタルシス」 原善編 『川端康成「伊豆の踊子」 作品論集』 クレス出版, 223-240.
- アーリ, J. 1995 『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行—』 (加太広邦訳) 法政大学出版局. Urry, John., *The Tourist Gaze: Leisure and Travel in Contemporary Societies*. London: Sage, 1990.
- 山中速人 1992 『イメージの<楽園>』 筑摩書房.
- 山下晋司 1996 「〈南〉へ —バリ観光のなかの日本人—」 『岩波講座文化人類学 7・移動の民族誌』 岩波書店, 31-59.
- 1999 『バリ 観光人類学のレッスン』 東京大学出版会.

参考資料

- 下田市史編纂委員会編, 1989 『図説下田市史 増補版』 下田市史編纂委員会.
- 南伊豆町, 2007 『南伊豆町町勢要覧 資料編 平成 19 年』 南伊豆町.
- 南伊豆町町誌編纂委員会編, 1995 『南伊豆町誌』 南伊豆町町誌編纂委員会.

観光と自然表象

川端康成, 2003『伊豆の踊子 他4編』岩波書店.

島崎藤村, 1922『藤村全集 第五卷』藤村全集刊行會.

矢津田義則, 渡邊義孝著, 蔵前仁一編, 2007『セルフビルド一家をつくる自由』旅行人.

参考ウェブサイト

まじっくらんど (くぼやまさとる) <http://www2.wbs.ne.jp/~mgland/>

平太屋 (平島平太) <http://boat.zero.ad.jp/heita777/>

テラ・憩いの里 <http://www.teraikoi.com>

くりすたり庵 <http://www.crystalian.com>

(付記: 上記 URL は全て 2007 年 10 月 31 日に確認した)